



対がん協会報

1部70円(税抜き)

第672号

2019年(平成31年)
2月1日(毎月1日発行)

公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です

〒104-0061 東京都中央区銀座7-16-12 G-7ビルディング9階
☎ 03-3541-4771 FAX 03-3541-4783 <https://www.jcancer.jp/>

主な内容

- 2～3面 RFLJ2018年度報告
- 4～5面 2019年RFLヒーローズ・オブ・ホープ決定
- 6～7面 がん教育外部講師研修会・シンポジウム

2016年の新規がん患者数99万5132人

「全国がん登録」に基づく初の集計

男性は胃、女性は乳房、男女合計は大腸が1位

厚生労働省は1月16日、2016年に新たにがんと診断された人は、男性が56万6575人、女性が42万8499人、男女計で99万5132人と発表した。全国の医療機関に情報提供を義務付けた「全国がん登録」制度に基づく初めての集計。全国がん登録は「がん登録推進法」施行により、16年から始まった。それまでの登録制度は医療機関が任意で届け出ているもので、登録漏れも指摘されており、今回の集計で、より実態に近い結果となった。

51万926人、女性は38万519人、男女合計89万1445人だった。がん患者情報提供の義務化により、16年の患者数は15年より、10万3687人増加した。

一方、高齢者の増加の影響を調整した、人口10万対の年齢調整罹患率は、16年が男性469.8、女性が354.1、男女計402.0で、こちらも15年の男女計362.2より増加した。

診断された患者数を部位別にみると男性は胃(9万2691人)、前立腺(8万9717人)、大腸(8万9641人)、肺(8万3790人)、肝臓(2万8480人)の順で多く、女性では乳房(9万4848人)、大腸(6万8476人)、胃(4万1959人)、肺(4万1634人)、子宮

(2万8076人)の順となった。男女合計では、大腸(15万8127人)、胃(13万4650人)、肺(12万5454人)、乳房(9万5525人)、前立腺(8万9717人)の順に多かった。

従来の地域がん登録による15年の新規患者数も同時に発表され、男性は

都道府県別では、長崎(454.9)、秋田(446.3)、香川(436.7)、北海道(428.2)、宮崎(426.4)の順に多かった。低いところは、沖縄(356.3)、愛知(367.5)、長野(367.6)、群馬(370.4)、静岡(378.5)の順だった。

2016年の部位別の新規がん患者数

	1位	2位	3位	4位	5位
男性	胃	前立腺	大腸	肺	肝臓
	9万2691人	8万9717人	8万9641人	8万3790人	2万8480人
女性	乳房	大腸	胃	肺	子宮
	9万4848人	6万8476人	4万1959人	4万1634人	2万8076人
男女計	大腸	胃	肺	乳房	前立腺
	15万8127人	13万4650人	12万5454人	9万5525人	8万9717人

がん相談ホットライン 祝日・年末年始を除く毎日
03-3541-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談(無料、電話代は別)に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」(☎03-3541-7830)を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

医師による面接・電話相談(要予約)
社労士による就労相談(要予約)
予約専用 03-3541-7835

日本対がん協会は医師による面接・電話相談と社労士による就労の電話相談(ともに無料、電話代は別)を受け付けています。予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までです。医師による相談は電話が1人20分、面接は30分、社労士による電話相談は40分になります。詳しくはホームページ(<https://www.jcancer.jp/>)をご覧ください。

特集 リレー・フォー・ライフ・ジャパン

2018年度 リレー・フォー・ライフ・ジャパン(RFLJ)活動報告

公益財団法人日本対がん協会 RFLJ マネジャー **平野登志雄**



初開催のRFLJ石川

2018年度は全国48地区でリレー・フォー・ライフ・ジャパン(RFLJ)の活動が展開されました。台風や雨などの影響を受けた地区も多くありましたが、大きな事故も無く、無事に終了する事ができました。まずは、年間を通して活動を続けていただいた各地実行委員会の皆様、イベント当日のボランティアとして、またチームや個人としてご参加いただいた皆様、ご寄付・ご協賛にてご支援下さった皆様、RFLをご支援いただいたすべての皆様に厚く御礼申し上げます。

今年度も各地区の活動において、たくさんのお会いがあり、新たな感動と絆が生まれました。

金沢で初開催

石川県金沢市で新たに活動が始まりました。実行委員長の堀均さんは、自身もサバイバーであり、「生まれ故郷の石川で、ぜひRFLを」との強い想いを胸に、人脈をたどりながら、友人や知人、地元の企業、行政、学校等々幅広く理解を求めつつ参加を呼び掛けていきました。

その結果、多方面より多くの方が集まり、実行委員会が組織されました。

そして活動の集大成として行うリレーイベントを9月29～30日に、金沢城址・兼六園近くの「いしかわ四高記念公園」で開催することを決定し、約1年間にわたる活動を行ないました。

リレーイベントは、台風接近にともない、残念ながら29日のみの1日開催となりましたが、皆で力を合わせて行った活動は、参加した皆様の心に感動を呼びました。中でも、リレーウォークのスタートに行くサバイバーだけが歩く「サバイバーズラップ」の中に、元気に笑顔で歩き始める子どもたちの姿を見た時、本当に感動しました。

半面、鶴岡(山形県)と徳島(徳島県)の2地区でリレーイベントが休止となりました。それでも徳島には、リレーイベントに毎年参加し仲間にあう事を楽しみにしている方がおり、その人たちの想いに応え、徳島では2019年度のフル開催へ繋いでいくためのイベントを行いました。

5地区が 開催10周年

一方で、宮城、さいたま、川越、広島、福岡の5地区が10周年を迎えました。長年継続す



こつこつと11年小さなリレー(RFLJ小松島)



若さあふれたリレー(RFLJ滋賀医大)

る事の難しさを痛感する中、RFLの活動意義を実行委員会メンバーで問い続けながら乗り越えてきた結果であり、地域にしっかりと根付いてきた証でもあります。

一人一人の力は小さくても、その力を合わせることで大きな力にしてがん征圧を目指し、一日でも早くがんが苦しむことのない社会を構築する、そのRFL活動は今や世界30カ国に広がっています。

この力は、生きる希望と勇気を与えてくれることは間違いありません。この力がより大きな力となりますよう、引き続き、皆様方のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



10周年のさいたまと川越がエール交換

特集 リレー・フォー・ライフ・ジャパン

リレー・フォー・ライフ・ジャパン 2018年度 収支報告一覧

	月	日	都道府県	地区	参加人数	チーム数	サブパノ数	ご寄付総額	実行経費	ACS寄付	協会寄付	振込額	寄付率
1	4	14・15	和歌山	和歌山	557	24	51	1,636,651	1,016,186	49,100	571,365	620,465	37.9%
2	5	12・13	熊本	熊本	1,300	43	150	1,847,561	1,074,096	55,427	718,038	773,465	41.9%
3	5	19・20	茨城	つくば	1,350	24	85	2,472,950	1,816,071	74,189	582,691	656,879	26.6%
4	6	9・10	兵庫	神戸	1,400	39	50	1,882,547	1,416,319	56,476	409,752	466,228	24.8%
5	6	23・24	青森	八戸	2,800	34	94	2,317,072	1,390,174	69,512	857,386	926,898	40.0%
6	6	30・7/1	東京	御茶ノ水	1,040	20	162	1,225,002	138,002	36,750	1,050,250	1,087,000	88.7%
7	7	21・22	北海道	苫小牧	1,200	31	42	2,193,822	1,443,822	65,815	684,185	750,000	34.2%
8	7	28・29	岩手	釜石	230	21	14	502,960	253,073	15,089	234,798	249,887	49.7%
9	8	25・26	北海道	室蘭	0	25	0	2,015,585	715,492	60,468	1,239,625	1,300,093	64.5%
10	8	25・26	福島	福島	2,000	42	200	5,041,969	2,000,086	151,259	2,890,624	3,041,883	60.3%
11	8	30・9/1	山梨	甲府	660	13	140	2,110,823	2,085,575	63,325	-38,077	25,248	1.2%
12	9	1・2	兵庫	芦屋	2,000	82	100	4,303,962	3,193,352	129,119	981,491	1,110,610	25.8%
13	9	1・2	青森	青森	754	17	98	1,005,344	686,279	30,160	288,905	319,065	31.7%
14	9	1・2	岩手	北上	506	12	51	1,511,434	809,275	45,343	656,816	702,159	46.5%
15	9	1・2	福井	福井	900	46	150	1,453,581	976,693	43,607	433,281	476,888	32.8%
16	9	8・9	埼玉	さいたま	3,500	57	105	4,203,723	3,261,449	126,112	816,162	942,274	22.4%
17	9	8・9	静岡	静岡	1,100	28	45	3,105,986	909,577	93,180	2,103,229	2,196,409	70.7%
18	9	8・9	長野	松本	1,200	33	50	2,508,645	1,943,775	75,259	489,611	564,870	22.5%
19	9	8・9	福岡	福岡	1,465	59	110	2,530,013	1,710,013	75,900	744,100	820,000	32.4%
20	9	8・9	大分	大分	5,600	53	99	4,152,095	881,306	124,563	3,146,226	3,270,789	78.8%
21	9	8・9	宮崎	宮崎	667	46	70	2,443,494	1,937,216	73,305	432,973	506,278	20.7%
22	9	8・9	岩手	一関	1,200	39	39	3,808,038	2,137,728	114,241	1,556,069	1,670,310	43.9%
23	9	8・9	栃木	壬生	2,151	46	124	5,346,993	4,174,113	160,410	1,012,470	1,172,880	21.9%
24	9	15・16	埼玉	川越	2,500	39	188	3,491,264	2,648,937	104,738	737,589	842,327	24.1%
25	9	15・16	長野	長野	2,000	35	150	3,878,264	1,709,197	116,348	2,052,719	2,169,067	55.9%
26	9	15・16	静岡	長泉	486	12	43	1,255,274	478,878	37,658	738,738	776,396	61.9%
27	9	16・17	広島	広島	981	41	84	3,347,537	1,597,537	100,426	1,649,574	1,750,000	52.3%
28	9	22・23	新潟	新潟	1,429	28	124	3,140,393	1,949,983	94,212	1,096,198	1,190,410	37.9%
29	9	22・23	佐賀	佐賀	1,200	42	134	2,021,261	1,441,534	60,638	519,089	579,727	28.7%
30	9	22・23	大阪	貝塚	712	36	21	1,324,919	643,799	39,748	641,372	681,120	51.4%
31	9	29・30	宮城	宮城	618	56	111	1,676,802	1,167,592	50,304	458,906	509,210	30.4%
32	9	29・30	山口	周南	290	15	21	904,278	390,665	27,128	486,485	513,613	56.8%
33	9	29・30	香川	高松	505	17	22	2,460,768	1,431,057	73,823	955,888	1,029,711	41.8%
34	9	29・30	愛知	東三河	360	17	25	1,729,160	1,044,640	51,875	632,645	684,520	39.6%
35	9	29・30	京都	京都	243	11	24	470,653	308,436	14,120	148,097	162,217	34.5%
36	9	29・30	愛媛	松山	2,087	39	51	3,894,879	2,879,843	116,846	898,190	1,015,036	26.1%
37	9	29・30	愛知	岡崎	1,376	41	92	2,226,756	1,944,843	66,803	215,110	281,913	12.7%
38	9	29・30	石川	石川	1,200	24	55	5,779,760	5,195,220	173,393	411,147	584,540	10.1%
39	10	6・7	神奈川	横浜	1,000	40	70	1,879,042	974,850	56,371	847,821	904,192	48.1%
40	10	6・7	群馬	前橋	8,300	87	220	6,962,535	4,413,061	208,876	2,340,598	2,549,474	36.6%
41	10	6・7	徳島	小松島	460	26	38	679,889	310,844	20,397	348,648	369,045	54.3%
42	10	6・7	奈良	天理	258	25	46	866,753	664,310	26,003	176,440	202,443	23.4%
43	10	7・8	大阪	あさひ	1,000	35	40	941,282	141,282	28,238	771,762	800,000	85.0%
44	10	13・14	岐阜	岐阜	530	19	72	927,599	213,129	27,828	686,642	714,470	77.0%
45	10	13・14	東京	上野	1,000	45	189	6,300,644	2,896,706	189,019	3,214,919	3,403,938	54.0%
46	10	13・14	滋賀	滋賀医大	550	20	50	1,571,954	1,058,519	47,159	466,276	513,435	32.7%
47	10	20・21	高知	高知	2,000	38	50	3,122,773	2,113,555	93,683	915,535	1,009,218	32.3%
48	11	10・11	沖縄	浦添	1,220	19	120	1,545,554	1,152,834	46,367	346,353	392,720	25.4%
	2018年 合計 (48会場)				74,885	1,641	4,069	122,020,243	74,740,923	3,660,607	43,618,713	47,279,320	38.7%

荒天の為、室蘭はイベント中止、和歌山・宮崎・大分・山口・香川(高松)・愛知(東三河および岡崎)・石川・京都・愛媛・奈良は予定を短縮して開催

※ ACS 寄付 = アメリカ対がん協会に対するロイヤルティ

寄付金は日本対がん協会を通じて、「がん医療の発展のための「プロジェクト未来」、「若手医師育成奨学金」や患者支援の「がん相談」や「検診推進」に役立てられております。一部はRFLJの運営資金に充てられます。



2019年



「ヒーローズ・オブ・ホープ」受賞者決定

「ヒーローズ・オブ・ホープ」は、アメリカ対がん協会(ACS)から認定される荣誉ある賞。自らの病と闘い、人々に希望や勇気を与え、前向きにがん立ち向かうサバイバーの代表として、リレー・フォー・ライフ(RFL)に参加する世界各国から選ばれる。日本では日本対がん協会がACSに推薦し、ACSの選考を経て決定する。

本年度は全世界から31人が選出され、日本からは村上さん、土橋さん、菊池さんの3人が選出された。

みんなでRFLに参加し続ける

村上 均さん(RFLJ東京中央 ケアギバー)



村上さんは、生命保険会社に勤続22年のセールスパーソンだ。セールスパーソンとして活動し始めた5年目の時、当時38歳の男性のお客から、突然一本の電話をもらった。

「菌茎から血が出るのだけど、検査入院で給付金は下りますか」との問い合わせだった。その後、彼は、肺がんであることがわかり、その時点でステージ4だった。

彼とは年齢的にも近かった。入院中の病院へ見舞いに行くたびに「私が本当はどんな病気なのか、診断書を預かっているあなただったら知っているでしょう」「他にどんな治療方法があるのかな」などと彼から様々な質問を受けた。しかし、当時は保険販売のことだけに熱心で、彼が保険を必要とする時に役立つ知識や情報を学ぶことを全くしていなかった。

結局、彼は翌年、妻と3歳の女の子を残し、旅立ってしまった。その後数年間、「自分はお客様に全く役立たないセール

スマン」との思いにさいなまれ、気持ちが高揚することのない日々が続いた。

そんな中、2006年秋にたまたま見たNHKの番組で、つくば市で行われたRFLを知った。「これだ。この活動の役に立ちたい」と、声に出して叫んでいた。すぐにネットで、RFLの実行委員会の次の会議の開催場所を調べ、呼ばれもしないのに、その会議に向向き、「お役に立てることがあればと思って参りました」と気持ちを伝えた。

当時、実行委員会代表を務めていた三浦さんからは「サバイバーでもケアギバーでもない健常者である方が、RFLを手伝いたいと言ってきたのはあなたが初めてですよ」と言われたのを忘れない。

翌年の07年、芦屋市で行われるRFLのため、大勢の会社の仲間たちに声を掛け200人で参加することができた。

初めて参加したRFLはとても感動的で、想像以上のものに感じた。がん罹患するという事は、24時間気が休まらないということであり、また周りの家族の苦しみや悲しみ、また医療従事者の治療に対する悩ましい気持ちにも気づか

された。

「今まさに命がついえようとしているサバイバーや、会場で他のサバイバーや子供たちのために一生懸命啓発活動をされている姿を、今も忘れることはできない。RFLは、そんなサバイバーやケアギバー、医療従事者たちのまさに“希望”そのもの」と思っている。

RFLへの初参加から10年が経ち、その間、会社の仲間4人ががんで亡くなった。その都度、がん撲滅への気持ちが高まった。人類は必ずがんを克服すると信じている。「多くの人々の日々の熱意の結晶がそれを実現するのであって、決して一人の研究者の力だけでそれがある日達成される訳でない。だから私達は、みんなでRFLに参加し続けなければならない」と考えている。

受賞後のコメント

この受賞は、個人の名誉ではなく、私たち全国のボランティア有志全員に、RFLが必要なくなるその日まで支援し続けて欲しいという願いだと思っています。

古本で日本対がん協会に寄付ができます

読み終えた本やDVDなどを活用しませんか？

詳しくは「チャリボン」 <https://www.charibon.jp/partner/JCS/>
(ISBNのバーコードがついた書籍類が対象です)

charibon by VALLE BOOKS

お問合せ(株式会社バリューブックス): 0120-826-295
受付時間: 10:00-21:00(月~土) 10:00-17:00(日)

RFL通じ生きる希望と笑顔を届けたい

土橋 武彦さん(RFLJわかやま サバイバー)



土橋さんは2013年の春、会社の健康診断で胃癌起性病変と診断された。6カ月後の胃カメラでの精密検査で「2cmくらいだから問題ないけど、これ以上大きくなってきたら悪性の可能性があるよ」と主治医から聞かされた。

「これ以上大きくなってきたら悪性」との言葉が気になり、手術を決意した。腫瘍の正体は悪性のGIST(消化管間質腫瘍)だった。聞いたことのない病名で、情報もなかった。何より不安だったのは同じ病名の人がないことだった。幸いGISTのことを知る主治医で、腫瘍も小さかったので、完全切除できた。治療は、分子標的薬のグリベックを毎日服用し続けている。

副作用は吐き気や下痢、浮腫、倦怠感、疲労感など。それも毎日、4年7カ月の間、いずれかの副作用に悩まされている。外見からは判断できない「見え

ない副作用」だ。職場にはGISTや分子標的薬による副作用のことなどを知っている人は誰もいない。そんな状態で職場復帰すると、「周りの人はすべて敵」と感じるほど精神的にも辛い毎日だった。

告知後約1年6カ月は孤独だったが、インターネットでGISTの患者会が主催する勉強会が大阪で開催されるのを知り、初めて同じGISTサバイバーの仲間と出会うことができた。

患者会の仲間は「GISTERS」として全国のRFLにチーム参加していることを知り、真っ暗だった自分の未来がパッと明るくなった。その年の秋に初めてRFLJ大阪二色の浜に参加し、そこでRFLJわかやまの実行委員の仲間と出会い、実行委員として参加している。

GISTERSやRFLJわかやまの仲間に出会い、気持ちが楽になったのか、副作用の吐き気はピタッと治まるようになった。それからは、たくさんの仲間に出会いたくて全国のRFLに参加している。

会いたい人がいるから会いに行く。たくさんの仲間と出会い、再会を喜び、ま

た会う約束をすることが「心の処方箋」となり生きる力になっている。

「決して1人じゃない」。後に自分が服用しているグリベックが、アメリカのRFLの寄付で開発されたことを知って驚いた。当時の参加者も遠い東の果ての国の日本で、多くの命が救われている事は想像も出来なかったのではないかと、思っている。

「RFLの活動の成果を感じるのは難しいが、今は、感じられなくても、10年後、20年後に多くの命が救われているはず。私自身がRFLの活動で救われた多くの命の1人だ。RFLの活動を通じて多くの人に出会い、楽しみ、生きる希望と喜びに満ちた元気な笑顔を届けたい」

受賞後のコメント

私が元気でいられるのは、アメリカのRFLの寄付で開発されたグリベックがあったからです。このお薬のおかげで、たくさんの命が救われました。RFLの活動を通じてたくさんの命が救われる事を伝えていきたいと思います。

悲哀から歓喜の人生に変わるRFJ

菊池 政彦さん(RFLJ青森 サバイバー)



菊池さんは、青森県立中央病院の近くで、妻と二人で「オルケスタ」と言う名前の小さなレストランを、1994年の4月にスタートした。店は2019年に

満25周年を迎えたが、満10周年を迎える前年の12月に胃がんが見つかり、胃の3分の2を切除した。

早期発見だったため、抗がん剤も放射線治療も受けずに済んだが、メンタル面で約2年間不調が続いた。

県立中央病院の近くでお店を営業していたことで、サバイバーやケアギバーの方も店に来ていた。そうした人たちと親しくなり、会話の中でがんの話題になると、菊池さんも、自分もがん経験者であることを明かすようになった。それでも元気に店に出ている姿を見せていると、

みんなが歓喜してくれた。また、そんな時に自分も歓喜していることに気づき、これからの使命感のようなものを感じるようになった。

店が20周年を迎える前年には、今度はパートナーである妻に乳がんが見つかった。さすがにショックだった。

妻は、半年間の抗がん剤治療の後、手術をした。3カ月後妻も店に復帰し、落ち着きを取りもどしたころ、県立中央病院のドクターやスタッフの人たちが来店し、「RFLをぜひとも青森でも開催したいので、実行委員長をしてほしい」と、頼まれた。

夫婦でがんを経験し、また、店を続けさせてもらっていることに感謝し、この話を引き受けることになった。14年8月に、正式に実行委員会が発足して翌年15年9月に、第1回RFLJ青森を開催することができた。

RFLは、自分が、がん患者だと言え

る場所だ。いろんながん患者との語らいで、みんなが生き生きとできる場所だ。「絶望の人生」から「希望あふれる人生」へ、「悲哀の人生」から「歓喜あふれる人生」へと変わるチャンスが、この場所にはある。そう確信するようになった。

妻は、昨年また新たにがんが見つかり、3週間に一度抗がん剤治療をしながら、店にも立ち、RFLの活動もしている。

「これからも笑顔が絶えない実行委員の仲間と、RFLJ青森の歴史を築き上げていく決意です」

受賞後のコメント

グローバル・ヒーローズ・オブ・ホープ(GHOH)の受賞を心より感謝申し上げます。2014年以来、皆様に支えられながらRFLの活動を行なって参りました。今後は日本のRFL発展のため、GHOHとしての役割を果たしていく所存です。今年還暦、猪突猛進頑張ります。

がん教育外部講師研修会・シンポジウム

文部科学省が開催

外部講師による実践例やモデル授業の発表も

学校でのがん教育にかかわる外部講師向けの「がん教育外部講師研修会・シンポジウム」が1月23日、東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された。文部科学省が日本対がん協会と日本医師会の協力で主催したもので、外部講師によるがん教育に関心のある医師ら医療従事者やがん患者・経験者、各地の教育委員会の指導主事、教員ら約530人が参加した。外部講師としてがん教育を実践している林和彦・東京女子医科大学教授と、乳がん経験者の三好綾・NPO法人がんサポートかごしま理事長による実践発表のほか、シンポジウムでは文部科学省の「がん教育総合支援事業」モデル校などの実践発表があり、がん教育のさらなる充実に向けて議論が交わされた。

研修会ではまず、横嶋剛・文部科学省健康教育・食育課健康教育調査官が、「がん教育の推進について」と題して講義した。第3期がん対策推進基本計画の中で医師やがん患者・経験者等の外部講師を活用し、子どもに、がんの正しい知識やがん患者・経験者の声を伝えることが重要であると明記されていることなどを紹介。がんについて正しく理解するとともに、がんを通して様々な病気への理解を深め、健康と命の大切さについて主体的に考えられるようにすることが、がん教育の目標になっていることを解説した。さらに知識だけを教えるのではなく、子供たちが主体的・対話的に学べるようにすることの意義を強調し、外部講師をする人への共通理解を求めた。

がん教育は意識の教育



林教授

その後、林教授が、がんの専門医として数年前からがん教育の必要性を感じて各地でがん教育の出張授業を続けてきてい

る実践例を紹介。大人へのがん啓発を続けてきてもなかなか理解が広がらないが、全国のすべての学校でがん教育が行われるようになれば、それが変わる、と全国を回ってがん教育に取り組んでいる思いを語った。

そのうえで、「がん教育は知識の教育ではなく、意識の教育」と強調。「がん教育をきっかけに、家族で話してもらい、家族の健康に気遣ってもらおう。がんになっても生活は変わらないということを思ってもらおう。がん予防に大



林教授の講演

切なのは自分の体は自分で守る意識を持ってもらうこと。こうしたことをリアルに伝えられるのは、外部講師の力」と訴えた。

また、東京都がん教育推進協議会をつくり、2022年にはすべての学校で外部講師を活用したがん教育を実施する方針を示していることを紹介。その際、学校医を活用する方針であることから、学校ががん教育をしたいと思ったらまず学校医に相談し、学校医が難しいと思ったら、地区医師会に相談し、地区医師会が手当できなかったら東京都医師会に上申するというような形式での外部講師確保の試みを検討していることも紹介した。

がん「を」、でなくがん「で」教える

三好さんは、「外部講師～患者の立場に求められるもの」と題して実践例を報告した。三好さんは、がんサポートかごしまのメンバーのがん経験者8人が「いのちの授業」の講師として鹿児島県内の学校を訪問する活動を続けて



三好さん

いることを紹介。学校の教員に、三好さんが作った資料でがんの基礎知識の授業をまず1時限してもらった後に2時限

目にメンバーが話す方式をとっている。メンバーは養成講座を受講した人で、今年度は95校訪問したという。事前に子どもから、「がん患者にききたいこと」などの質問を募っておき、それに答える形で、がんになった後の人がどうなるのかなどをきちんと伝えるように進めていることを紹介した。

三好さんはがん経験者が外部講師として求められていることについて、「健康や命の大切さを伝えること」と話し、さらに、経験者が語るときの留意点として、事前の打ち合わせが大切であることを訴えた。

がん患者・経験者の話は貴重な一方で、家族にがん経験者がいる場合は強い印象を与える可能性があることを指摘。がん教育を実施するときは事前に家庭に周知して、配慮が必要なことを事前に聞くようにすることを説明した。最後に、三好さんは、「がんを教える」のではなく、「がんで教える」との気持ちでがん教育をやっていると語った。



三好さんの講演

小中校のモデル校の実践例を報告

シンポジウムでは、文部科学省のがん教育総合支援事業のモデル校となった小学校、中学校、高校からの実践例と、茨城県のがん教育外部講師活用の



シンポジウムの様子

取り組みについての発表がされた。

まず、埼玉県教育局保健体育課の馬場久美子指導主事が、埼玉県立久喜市立菖蒲小学校でのモデル授業の実践例を説明した。6年生を対象にまず体育保健の時間でがんが死亡原因の1位であることを、グラフを見せて考えさせる。2時限目の道徳の時間でがん経験者をゲストに呼び、がんとわかったときのことなどの話を聞く。さらに3時限目の学級活動で、文部科学省の教材を使ってがんについて調べ、自分ができることを考える授業を展開する——といった授業の流れを紹介。が

ん経験者の話が、子供たちにとって、がんをより身近に感じるきっかけとなったことを示した。

次いで長野県教育委員会保健厚生課の鈴木亜希子指導主事は、松本市立女鳥羽中学校で、文部科学省作成のがん教育のスライド教材を選んで使い、保健体育の教員がいつも通りに授業した例を報告した。しかし、健康と命の大切さについては、外部講師の力を借りたい、と感じたことを紹介した。

また、鹿児島県教育庁保健体育課の畠野裕昭指導主事は、がんサバイバーでもある佐瀬一洋・順天堂大学医学部教授を外部講師として県立鹿児島東高校で授業を実施したことで、教員ががん教育が心の教育であること気づき、がん教育を「しなければならぬ」から「してみたい」と意識が変わったことを紹介した。

さらに茨城県教育庁健康教育推進室学校保健・安全担当の吉野恵美子指導主事は、茨城県が、がん経験者による

「茨城がん体験談スピーカーバンク」に協力を要請し、希望のあった学校でがん教育の講演会を実施するときに、外部講師の選定を依頼している方式を紹介した。

シンポジウムのコーディネーターを務めた野津有司・筑波大学教授・筑波大学附属中学校長は「命を大切にすること教育という点では、がんでなくても交通安全の題材でも同じだが、がんはきわめて子供に伝えやすい題材」とがん教育の特長を語った。

文部科学省では、がん教育が新しい学習指導要領に位置づけられたことから、中学校は21年度から、高校では22年度からがん教育を全面実施する方針を示している。最後に横嶋調査官は、現在はまだ移行期間ではあるものの、全国での展開を呼びかけ、「がん教育は等別なものとは思わず進めてもらいたい。外部講師の質の確保など課題はあるが、まずは実施して質を上げていけばいい」と語り、研修会・シンポジウムをしめくくった。

都立葛飾商業高校定時制で

佐瀬一洋・順天堂大学教授が

出張授業

東京都葛飾区の都立葛飾商業高校で12月19日、日本対がん協会の協力でがん教育の出張授業が行われた。講師は、循環器の専門医であり、自身も骨軟部肉腫という希少がんの経験者である佐瀬一洋・順天堂大学大学院教授。この日は、定時制の生徒70人を対象に、がんについて約50分の授業を行った。

佐瀬教授は、8年前に悪性の骨軟部肉腫を発症し、手術の前後2年間にわたって抗がん剤による治療を受けた経験を持つ。授業で佐瀬教授は、病気がわかったときには、同じ病気を扱った映画やドラマが作られていて、いずれも主人公が亡くなる悲劇として描かれて、悲しい気持ちになったが、生存率が上がるという新しい治療法の論文に出会い、乗り切ってきたことを紹介。そうしたことへの感謝の気持ちから、がんについて正しい知識を知ってもら

おうと、がん教育にかかわってきていることを話した。

その上で、長寿化の結果、がんが増え、日本人の2人に1人ががんになることや、年間で3人に1人ががんで亡くなっている状況を説明。文部科学省がホームページで公表している「がん教育推進のための教材」のスライドが画面や

日本対がん協会が作成したアニメ動画教材「がんって何？」の場面も使いながら、①がんはだれでもなる可能性のある身近な病気、もはや不治の病でない②多くのがんは予防と発見が有効③正しい情報を得ることの大切さ — の3点について、わかりやすく解説した。

がんも原因には生活習慣やウイルスなどがあり、生活習慣などで予防できるがんもあることから、女性では早めに子宮頸がん検診を受けることなど、がん年齢になったら定期的に検診を受



授業する佐瀬教授

けることや、タバコを吸わないことの大切さを訴えた。

また、がんについて正しい情報を見つけることの大切さについては、ネット上では、誤った情報も混在していることを知った上で、国立がん研究センターなど、信頼できる公的な機関の情報発信サイトで情報検索して吟味することをアドバイスした。

さらに、がんを正しく理解して、普段通りに接してくれることががん患者の願いであることなども紹介された。

垣添会長の「全国縦断 がんサバイバー支援ウォーク」が本に 『「Dr.カキゾエ黄門」漫遊記 がんと向き合って50年』

日本対がん協会の垣添忠生会長が昨年実施した「全国縦断 がんサバイバー支援ウォーク」の記録が、朝日新聞出版から単行本として発売されることになった。『「Dr.カキゾエ黄門」漫遊記 がんと向き合って50年』（2月7日発売、1500円+税）。

ウォークは2018年2月5日に福岡市からスタート。全国がんセンター協議会加盟の32病院を、一筆書きのように、できる限り歩いて訪ねた。

福岡市の九州がんセンターを皮切りに、次に佐賀市の佐賀県医療センター好生館へ向かい、九州の山中を横断して大分市の大分県立病院へ。フェリーで四国に渡り、松山市の四国がんセンターを訪問すると、瀬戸内しまなみ海道を歩き、本州へ入り…という具合だ。東京などでの仕事があるため、9回に分けて行われた。

7月23日に札幌市の北海道がんセンターでゴール。高橋はるみ道知事らの出迎えを受けた。96日間、総移動距離は約3500キロに及ぶ。

がん対策の課題が浮き彫りに

ウォーク中は、①「がん＝死」のイメージを変えたい、②予防(禁煙、たばこ対策)や検診による早期発見の大切さ、などを訴えた。また、多くのがんサバイバーの声に耳を傾けた。医療者らの率直な思いも聞いた。

- ・「金の切れ目が治療の切れ目になりかねない」
- ・「患者会を病院内で自由に開きたい」
- ・「地方では、がんになったことを隠す傾向がある。医師不足でセカンド



ウォーク中の垣添会長(2018年7月23日、札幌市で)

- ・「オピニオンを取るのも難しい」
- ・「日本はたばこ対策では後進国だ」
- ・「ピアサポートを強化してほしい」
- ・「(治療が辛いという)母に気力を取り戻してもらうにはどうしたらよいか」
- ・「本人が望んでいない余命を告げるのはどうなのか」
- ・「がんと就労をどう両立させるか。治療費の問題にも直結する」
- ・「精度の高い検診を守り、受診者を増やすにはどうしたらいいのか」

垣添会長の信念は「がん医療は(医療者ではなく)がん患者のためにある」だ。数々の切実な声は、多くの課題を浮き彫りにした。

道中、さまざまな体験をした。

通りすがりの人から、繰り返し応援の言葉をもらった。出会った人に寄付をいただくこともあった。冬の九州では大雪に遭い、新潟県では命綱とも言えるスマートフォンが雨に濡れて故障した。関東では、泌尿器科医なのに尿閉になった。そんなピンチも、周囲の応援で乗り切れた。

歩いたからこそ、見えたことが多い。主要国道でも、都市部を離れると歩道がない。沿道で目立つ高齢者施設やセレモニーホールは超高齢社会や多死社会を実感させる。空き家や耕作放棄地、無人駅などからは、地方や農業の将来を考えさせられた。花や蝶など自然との触れ合いに心が和んだ。

ウォークの期間中は、日々のあれこれを、インスタグラムとウォーク専用サイトの一言ブログで発信した。

書籍化にあたり、一言ブログの文章を大幅に拡充し、インスタに上げた写真も多数、再録した。読者は垣添会長と一緒に旅をしている気分になり、がんについての意識を深められる。同時に日本の「今」も発見できるだろう。

100万人の声を結集したい

垣添会長は、2007年の大みそかに妻を肺がんで自宅で見取った遺族・ケア



ソフトカバー272ページ。
朝日新聞出版刊。1500円(税別)。

ギバーであり、自らも腎臓がんと大腸がんを経験したサバイバーでもある。

生涯に2人に1人ががんになる時代。5年生存率が60%を超え、今やがんは、長く付き合い、向き合っていく病気となってきた。

それなのに、社会の理解やサポート態勢は不十分で、偏見も根強い。がんと診断された人の3人に1人が離職するというデータもある。だからだろう、告知された人は、頭が真っ白になり、孤独や不安に悩まされる。

垣添会長は、そんな状況を変えたいと思い、2017年6月に、患者・家族支援の事業「がんサバイバー・クラブ」を立ち上げた。役立つ情報の発信やサバイバーが集えるイベントを開いたりしている。無料登録制のオンラインコミュニティの構築も計画中で、朝日新聞社のクラウドファンディング「A-port」で支援を募った。

がんサバイバー・クラブの活動は寄付で成り立っている。若干でも寄付をしてくださる会員が100万人になれば、国や社会へ声を届ける大きな力になる。そんな目標を持っている。ウォークでは、こうしたことも訴えた。

訪問させていただいた病院、日本対がん協会の道府県の支部、リレー・フォー・ライフ・ジャパンの各地の実行委員会など、ウォーク達成には、多くの方とお力添えをいただいた。垣添会長ともども、協会本部としても、心よりお礼を申し上げます。

(中村智志・日本対がん協会事務局次長)